

『金枝篇』(The Golden Bough)と出会って

風花 小町

私は最近ある一冊の本と偶然にも運命的な出会いをしました。長い間 '金の枝' という奇妙なタイトル文字が気にはなっていたのですが、我々が柳田国男をとりあげて読んでいなかったらこうしてこの本にのめり込むようなことにはなっていなかったと思うのです。まったくの柳田ワールドと言っていい同じ世界がありました。

まず次に、この本からの少し長い引用をします。

「(オーストラリアやイギリスのサセックスでの例をあげた後で)例えばドイツでは、歯の抜けた者はそれをハツカネズミの穴の中に入れねばならぬとの戒めが、ほとんど全国的に民間にまもられている。...またストーブの後ろに立って歯を頭ごしに後ろの方へ投げ、『ハツカネズミさん、おまえの鉄の歯をおくれ、私の骨の歯をあげよう。』と言うこともある。...

ヨーロッパから遥かに遠い太平洋のララトンガでも、子供の歯の抜けた時には次の祈りが繰り返される。

『大ネズミ、子ネズミ。私の古い歯をあげよう。どうか新しいのをおくれ。』

そして歯は草葺き屋根の上に投げられたが、その朽ちた屋根にはネズミが巣くっているからであった。(抜けた歯は)実質的な接触がなくなった後までも、なお身体と共感的な結合を保つと普通信じられている...。」

上の引用は、スコットランドのグラスゴー生まれで社会人類学者のジェイムズ・フレイザー(James George Frazer 1854 ~ 1941)教授著作の『金枝篇』(The Golden Bough) 岩波文庫 水橋卓介訳 1951年初版発行 からのものです。

私はこの本のこの部分を読んだとき、驚いたと同時に大きな感動を覚えました。1947年(昭和22年)生まれの私も、さきの引用部分にあったのと同じことを1950年代の日本でしていたのですから。

幼い頃、乳歯が抜け落ちるたびに親や友達から「上の歯が抜け落ちた時は床下に、下の歯の時は屋根に投げるといいんだよ。」と言われて、5~7才頃の私は理由の分からないままこの言葉に従ったものです。親も子に教えたのだし、友達もそうしていたのだから、こうすることで新しく生えてくる歯は丈夫なものになるという共通認識が社会全般にあったことは確かです。しかもこのことは日本だけの現象ではなく、外国のいたるところに同じような風習があったというのです。

そしてフレイザー氏はこの風習の中に、原始人間が自然界や宇宙という広大な厳しい環境の中で体得した原始宗教のもとになるもの、すなわち地域とか人種とかいうものを越えたもっと根源的な概念を見い出そうとしているのです。

抜けた歯は、抜けた後でも歯の持ち主と重要な意味のあるつながりを持っていると昔

の人は考えていたのです。齒の他に、ヘソの緒、胎盤をふくむ後産、毛髪、衣類など膨大な例をあげています。こうして身体の一部にも人間の全霊がやどっていると考えていくと、人形による呪いのような呪術が生まれることにもなるのでしょう。

万葉の昔から日本でも、兵役や遠くへ労役にかり出される男性が想いを寄せる女性の肌着を身につけて出かけたとか、人形に身体の悪い部分を記してお祓いをしてもらったとかもありました。'霊' というものを身近なものに感じて大切にしてきたことは全人類共通のことなのです。

実はフレイザーは、奇妙な風習を持つ閉ざされた村の話を知ることから、大きな疑問の世界に入り込むことになるのです。

北イタリアの山奥の森深くにある景勝地にネミという名の村があり、ここには「ディアーナの鏡」と呼ばれる湖がありました。このネミの村の近くにはディアーナゆかりの神聖な森と聖なる場所とがあったといえます。もちろん村の人々の厚い信仰によってこの場所は守られていたのでしょう。

問題なのは、この聖なる場所をとりしきる祭司職の人は、この掟として、殺されることによってのみこの祭司職を次の人に継承することができたというのです。

いいかえれば、いったん祭司となるや、昼夜をとはず剣を持って襲撃してくる敵を警戒していなければならないというのです。祭司の思考能力が衰えたり、老いとか病気で体力が落ちれば剣によって命を奪われるという弱肉強食の世界なのです。自然の節理にかなった考え方とも言えます。

<この聖所の近くに一本の聖木が祭司によって守られていて、この木の小枝を切り取られるということは、祭司の資格の喪失を意味していたといえます。この小枝が金の枝 (golden bough) と呼ばれたのです。>

この奇妙な風習は、古典時代のギリシャやローマにはその例を見ることができないにもかかわらず、不思議なことにこのイタリアの山奥では帝国時代まで残っていたというのです。この素朴で野蛮な未開の習わしは、周囲の社会の動きから隔絶された山奥の村ネミにあったからこそ、綿々と受け継がれて残ったのでしょう。

フレイザーはここに、古典時代のギリシャやローマよりもっと前の原始の人々の考え方がとり残されて存在していると考えたのです。'人間が最初の素朴な人生哲学を考え出した頃の根本的な共通性' を探りあてることができるといえます。

そしてこの祭司は、さまざまな原始社会でよく見られるように、王の称号をも合わせ持っていたのです。宗教面と政治面の両方の権力を手にしていました。

私は偶然『金枝篇』を手にし、そこに柳川国男の世界と同じものを見つけて感動しました。そして訳本を斜めに読みとばしただけでおこがましくもこうして文章にしています。我々三人で柳田国男を読むのは一応ここで終えようとしている今、このフレイザーという人が 19 世紀から 20 世紀前半にかけて世界の人々が各自の民族へ目覚めていく時代の流れの中でこの本をなし、また日本の民族学研究におおいなる影響を与えたことを書いておきたかったです。

永橋さんの後書きによれば、この本を日本に最初に紹介したのは、京都大学文学部教

授であった上田敏だと述べています。日本民俗学の祖といわれる柳田国男(1875 ~ 1962)もこの本をすべて読んでいるのは確かで、どれ程の影響を受けたかはわからないが、柳田はフレイザーを訪問してもいると言っています。折口信夫(1887 ~ 1953)も熱心な読者だったといえます。東大で学びアイヌのユーカラの研究をした金田一京助(1882 ~ 1971)や沖縄琉球語の研究をした伊波普猷(1876 ~ 1947)もきっと影響を受けたに相違ありません。

日本民俗学の先駆者たちは、ドイツやイギリスで始まっていた民俗学への強い関心に触発され影響を受けて、日本各地や周辺アジア各国で古来から言葉や風俗で伝承されてきたものを収集し研究する道に進んだものと思うのです。

(2004、9、23 記)



聖なる木というのはカシワの木であろう。カシワの木にはヤドリ木が生えた。ヤドリ木の実はうすい黄色で、ある物語の中ではこの木の一片をたずさえて暗い旅の道案内をしたとも語られる。ヤドリ木を乾燥すると葉も枝も黄金色に輝き、今日でもヨーロッパの農民はこれを魔よけに使っているという。金枝のいわれはこんなところか。(永橋卓介 解説より)